

「韓国併合」一〇〇年に寄せて

鶴田 勝俊

「小早川・加藤・小西が世にあらば今宵の月をいかに見るらむ」

これは日本の中学校歴史教科書に載せられている初代朝鮮総督、寺内正毅の歌です。

この歌は明治時代、我が国がその体質を強い国家に変質させていったことを端的にあらわしています。

日本が朝鮮にかかわる姿勢は、少なくとも、日露戦争前まではこうではありませんでした。朝鮮の近代化が「ロシアの脅威に対して日本の独立を防衛するため」という理由は日露戦争の勝利で消滅します。近代国家建設は朝鮮自身に任せればよかつたのです。しかし日本はそうはしませんでした。帝国主義風潮に乗って「保護」から「併合」という国家体制に変身したのです。ロシアを破つた日本への称賛がアジアで巻き起こつた

こと、次いでアメリカとイギリスが世界列強の一員として認められたことなどが、日本を狂わせたと思います。



現在の群山港(全羅北道)

日露戦争が終わると日本は、第二次・第三次日韓協約(「韓」は大韓帝国)を強要し外交・内政権を奪い、統監府の「保護下」に置き、其の後、一九一〇年八月二十二日、韓国を併合してしまいます。今日の韓国ではこの日は「国恥日」とされています。その狂気は、併合した朝鮮とロシアから取り戻した遼東半島を足場にし、満州、中国へと日本は兵を進め、最後は太平洋戦争に

皇民誓詞唱和等による皇民化政策と日本語使用の強要、改名などで同化政策を実施し、朝鮮民族の歴史と文化を消滅させようとした。

さらには日本がポツダム宣言受諾を引き延ばしたためにソ連の対日参戦を許し、それが結果として民族分断をもたらしました。其の後日本はそこから起こつた同族戦争を利用して経済再建も果たしました。

独立後、民族の怨念は「日本全面拒否」としてながさきも続きました。そして一方では国情不安定のため日本に残つた朝鮮の人達は日本人の誤つた民族差別に苦しめられました。

一九六五年の日韓基本条約は「賠償金」問題を解決したに過ぎず、日中・太平洋戦争の認識、個人保障問題などは未解決のままです。日本への不信は教科書や靖国問題を通して突きつけられ、個人保障の訴訟提起として続きました。

一九九八年、大統領になってまっ先に訪日した金大中は、国会でつぎのように演説しました。

「歴史的に日本と韓国の関係が不幸だつたのは、約四〇〇年前の秀吉と争つた七十年間と、今世紀初めの植民地支配三十五年間であります。このようにわずか五十年にも満たない不幸な歴史のために一五〇〇年にわたる交流と協力の歴史全体を無意味なものにするというのはじつに愚かなことでもあります。…日本には、過去を直視し歴史を恐れる真の勇気が必要であり、韓国は、日本の変化した姿を正しく評価しながら未来の可能性に対する希望を見いだす必要があります。」(東京書籍・平成十五年度版中学歴史教科書から抜粋)

金大中は李承晩以来続いてきた対日拒否政策を転換させ、日本文化を解禁しました。

それ以来、日韓の交流は拡大してきましたが、今日、日本の若者の六〇%が「韓国が好き」と答えても韓国では七〇%が「日本が嫌い」と答えます(NHK調査)。前者は交流の成果、後者は対日歴史教育の結果です。二つの数字は、交流と歴史を学ぶことの大切さと同時に、今後の課題も意味しています。

今日では加害・被害の世代から子・孫の世代へと移っています。過去を忘れて未来志向はありません。おたがいが正しく歴史を学び会う機会を交流の中に含めながら真の友好関係を築いていくことが望まれます。(諫早市在住)

突入してしまいました。

初代朝鮮総督になつた陸軍大将寺内正毅は、併合を強硬に主張した山県有朋の直弟子でした。その寺内が開始した「武断統治」は日本のために朝鮮社会を破壊し、改造するものでした。それは土地と米を奪うことに重点が置かれましたが、のちには「ひと(生命)」へ移っていききました。之をざつとまとめると次のようになります。

一、「土地調査事業」(一九一〇〜一八)の結果

①三・三%の不労地主(大部分が日本人)が五〇・四%の土地を所有

②七六・九%の農民が小作農、またはそれに近い自作小作農

二、「米増産事業」(一九一七〜三四)の結果

※一九三六年を一九一六年と比べて

①米生産量は約一・六倍にふえたが、日本への移出量は約六・七倍に

②朝鮮人の年間米消費量は〇・七二石から〇・四〇石に(一石は大人が一年間に食べる目安)

三、戦時動員

①「強制連行」(労務動員) 約六十万人(炭坑・軍需産業などへ)

②兵士動員 二十万七千人(うち戦死九万一千)

③軍属動員 十五万五千人(うち死亡四万八千人)

④従軍慰安婦 推定一万人(中国・台湾をふくむ)

「土地調査事業」は届け出によって農地の私有権を確定するものでしたが、届けなかつた農民は自分の土地を総督府に没収されました。それまで、李氏の朝鮮がとつてきた愚民化支配による文盲率の高さも大きな仇になりました。これは米不足とともに、韓国国内では厳しい飢えと流浪の民を生み、三〇〇万の国外移住を引き起こし、朝鮮社会は破壊されました。

また、日本は抗日独立運動を武力で押さえ込む一方で、神社への参拝、

風信

〇二月は「にげ月」と言う。二月の行事は節分の「豆まき」に始まり、あつと言

う間に過ぎてゆく月であると説明している。

〇然し私の二月の行事は、五日(土)県下九篠会の幹事会、十八日(金)午後二時より長崎日本ポルトガル協会の平成二十三年度理事会・通常総会があり収支決算・役員改選があつた。そして最後に恒例の記念講演会という事になり、私(越中)が「長崎を中心にした南蛮美術工芸」の話をさせて戴いた。

〇翌十九日(土)は、純心大学学芸員資格講座の一つとし「長崎食の文化史」を私に担当依頼あり、久しぶりの二日連続の講座となり大いに緊張した。

〇三月に入ると、毎週月曜午前中は恒例の長崎学講座、火曜日は長崎古文書学研究会、水曜日は長崎懇話会と忙しい。

〇三月の年中行事と言えば三月三日の桃(女)の節句である。然し「三月では桃の花は、まだ咲いていないのではありませんか」と言われる。実は、この節句も中国の歴史書によると「三月上巳の節供」を起源とし、今年四月十二日が「桃の節句」の日に当るそうである。

〇長崎の三月桃の節句料理については脇山壽子女史の「長崎年中行事抄」や私の「雛まつり料理」(長崎学・続々食の文化史)を読んで戴くとよい。

〇三月は十八日より「春のお彼岸」が始まる。彼岸の語源は先年も記したがパーリー語ではParham tramとあり、我が国では聖徳太子の頃より始まったと言うが、文書の上では延暦二十五年二月の記録が最古であるとされている。この彼岸会の中日、長崎野母の脇岬観音様を拝すれば西方浄土が海上に浮びあがつたと、鎌倉時代の「元亨釈書」には記してある。

〇今月は次の御本を御寄贈いただきました。

『長崎学芸事典』。著者の阿野露団氏は多年長崎新聞社学芸部に勤務され、長崎の学芸文化について多くの貢献を残しておられる。今回の著書は氏の多年の研究を集大成されたもので大いに参考になるものが多かった。(形文社刊)

『民具マンスリー』二〇二〇・七―一〇号 神奈川大学日本常民文化研究所より昭和四十三年以来毎年発行されている民族学専門の研究書で、今年「百鬼夜行絵巻」「会津農書」からさお研究「タコ容溪」などの論考が発表されていた。

『長崎談叢 第九十八輯』長崎談叢の第一輯が発刊されたのは昭和三年五月であった。今回はレンゾ神父の「古賀地方のキリシタン史」に始まり立派な論考が多くよく編集され、さすがに長崎を代表する郷土誌であった。(長崎史談会刊)

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一―一五四〇

十八銀行公会堂前出張所2F

